主　論　文　要　旨

報告番号	甲 (乙) 第　　号	氏　名	原　口　水　葉

主 論 文 題 名

Determinants of chronic obstructive pulmonary disease severity in the late-elderly differ from those in younger patients

（後期高齢者におけるCOPD重症度評価の特徴）

（内 容 の 要 旨）

慢性閉塞性肺疾患（Chronic Obstructive Pulmonary Disease: COPD）は世界第4位の死亡原因であり、高齢化に伴って益々の増加が予想されている。今までCOPDは気流閉塞の程度（対標準1秒量: %FEV_1）で重症度が分類されていたが、近年症状や増悪リスクを加味した多面的評価での分類が着目されている一方、年齢がCOPDの病態へ与える影響に着目した研究はほとんど成されていない。私は本研究において、後期高齢COPD患者が持つ特徴を、75歳未満の患者と比較して明らかにすることを目的とした。

対象は慶應義塾大学病院と関連病院に通うCOPD患者443名であり、252名は75歳未満、191名は75歳以上であった。75歳以上と未満の両群において、質問票COPD Assessment Test（CAT）とSt.George's Respiratory Questionnaire（SGRQ）を用いて健康関連QOLを、胸部CTを用いて気腫化(percent of low attenuation areas ; LAA%)を、心エコーで肺高血圧の有無を、その他血液検査や服薬内容から併存症を確認した。

Global Initiative for Chronic Obstructive Lung Disease（GOLD）の重症度分類に用いる%FEV_1は両群で差はなかったが、Grade I~IIIの群において、絶対値FEV_1は75歳以上の方が低かった。年齢を考慮せず%FEV_1という指標のみで重症度を規定することの問題点が示唆された。気腫化（LAA%）と肺機能（%FEV_1）は両群で相関していたが、75歳以上ではその相関は弱く傾きが緩やかであり、survivor effectなどにより75歳未満と異なった特徴を持つことが示唆された。健康関連QOLは、75歳未満では肺機能の増悪に伴い増悪するが、75歳以上では肺機能に伴った変化は認めず、Grade IVでは75歳以上の方がQOLが良い結果だった。この傾向は、CAT、SGRQの他に、呼吸器疾患に限らない健康関連QOLを表すSF-36でも同様に示された。在宅酸素の導入率もGrade I~IIIにおいては75歳以上の方が高いが、Grade IVでは逆転しており、75歳以上のGrade IV患者にはsurvivor effectが反映されていると考えられた。肺高血圧が疑われる症例(推定収縮期肺動脈圧eSPAP□35mmHg)も、全体としては75歳以上で高率であるが、Grade IVでは逆転する傾向が認められた。75歳以上において、高血圧、大動脈瘤、前立腺肥大、貧血、白内障が75歳未満よりも高頻度に認められたが、CAT scoreに影響を与えると報告されているうつや逆流性食道炎は、年齢による頻度の差を認めなかった。

本研究の重要な点として、実臨床で出会う患者をそのまま対象としている点がある。今後さらに増える高齢の患者診療にあたる際には、気流閉塞の程度のみでは表せないCOPDの重症度にも考慮が必要と考えられた。